

武藏野日曜集会 降誕節

キリストの幕屋
——ヨハネ伝第1章1～18節——

小池辰雄

1974年12月22日

言は神と共にあり 第三の聖靈が在る 生命の靈氣を受ける 天地正大の氣 青ノ洞門 神聖なる太陽へ 神に直結の世界 キリストは無者 キリストの幕屋 聖靈の幕屋 『教会の誤解』の一節 「信仰」ではなく 「信交」 聖言の現実の中に自分を入れていく 十字架という門を通りば聖靈がくる 魂の中にキリストの靈震を受けとつて進んでいく

【ヨハネ1・1～18】

¹ 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。 ² この言は太初に神とともにあり、 ³ 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。 ⁴ 之に生命あり、この生命は人の光なりき。 ⁵ 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。 ⁶ 神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。 ⁷ この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。 ⁸ 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

⁹ もろもろの人をてらす 真の光ありて、世にきたれり。 ¹⁰ 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。 ¹¹ かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。 ¹² されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる權をあたえ給えり。 ¹³ 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。 ¹⁴ 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその榮光を見たり、實に父の独子の榮光にして恩恵と真理とにて満たり。 ¹⁵ ヨハネ彼につきて証をなし、呼ばわりて言う『「わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』 ¹⁶ 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。 ¹⁷ 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。 ¹⁸ 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。



● 言は神と共にあり

¹ 太初に言あり、言は神と偕ともにあり、言は神なりき。

漢文の聖書には、

「原始に道あり、道は神と共にす。道は即ち神なり」

と書いてある。昔の日本語の聖書にもこの「道」という字が当ててある。「道」というのは、漢文で動詞にするときには、「いう」とも読む。「ことば」です。靈言。

「はじめに靈言あり」

と言つたつてかまわない。あるいは、「天理」といつてもいい。天理教ではないけれども。この「ロゴス」というギリシア語は、「理」という意味を非常にもつていますから。それから「ヌース」(理性、魂)の意味ももつてゐる。靈的な意味です。だから、私は「靈言」と訳すんですけれども。

「言は神と偕ともにあり」

と。あるいは「ともに」というのは「向かつて」という訳し方ができる。一対一の関係です。そして、

「言は神なりき」

と。言の本質は神的なものである。「言は神なり」というのは、そういうことです。神的なものだと。靈的な「言存」とでもいいますかね——まあ、そんな言葉はないですけれども——靈的な言存が「言」である。日本語で「ことば」と言つてしまふと困るけれども、これはしかし觀念ではない。「ことば」というと、へたすると、觀念的な響きをもちます。「道」といつてもそうです。けれども、これは實在なんです。それを間違えると、いかん。

「わが言は靈なり生命なり」

と、キリストが言われたでしょ。キリストは神の言なんです。神の現象体です。神の現象体がイエスで、それが天界におられた。それをヨハネは「言」といつていて。それは絶対に觀念ではない。實力のあるところの、靈的生命を持つたところの言存体である。そういう一番の第一原因であるもの。第一原因であるものは同時に第一目的をもつてゐる。原因と目的、始めと終わりということ。

「我是始めなり終わりなり」

というでしょ。キリストはヨハネ默示録で、「我是始めなり終わりなり」と言われた。即ち、第一原因であると同時に究極目的である。そういう靈的実体が、この「言」とここにいわれている。当時のギリシア哲学のあるひとつの言葉を借りて、「ロゴス」という言葉を借りて言つたので、決してギリシア哲学における「ロゴス」とは違う。完全にヘブライ的な——思想といつてもおかしいが——考えからきている。そういった味が、同じ言葉を使つても、ギリシア人が使うのと、ヘブライ人が使うのとは中味が違つてくるわけです。

² この言は太初に神とともにあり、



と。神と共に在。この「共在」ということを考えると——「偕在」でもいいけれども——「共に在る」ということは、「我と汝」という会話がなりたたなければ、「共に」ということはない。この靈的な実在が人格關係をもつて語り合う間柄である。語り合うためには、いわゆる言葉以上のところで通ずるもののがなければ、本当の語り合いにならない。人間の關係でも、いわゆる会話はできても、本当の会話ができるためには——以心伝心というでしょ、心を以て心に伝える——言わず語らずのうちに、「目はものを言う」というが、口の言葉よりも目の言葉の方がもつと深い世界を表す。即ち、いわゆる「ロゴス」「言」は、どうしても発すると同時にズレがくるんです、本質からは。だから、言は暗号なんです。

聖書も暗号です。聖書の言は、

「意味がどうだ」

なんていくら詮索したつて出てこない。聖書の言の暗号が何を語らんとしているか。そこにあるものはもはや観念ではないもの。これがこの言から読めなくてはいかん。人間の会話にしても本当に、親友同志ならば、あるいは恋人同志ならば、あるいは夫婦の關係とか、そういうものはもうちょこつと言えばすぐ通ずる。そういうようなものである。そのためには、「共に在る」ということは、空間的にただ共に在つたってしようがない。心と心、魂と魂があい通ずるもののがなければならぬ。

●第二の聖靈が在る

そこで、ここにはいきなり書いてないが、

「神と共に在る」

というこのロゴスがどうして共に在り得たかというと、第二のものが在るから在り得たんです。その第三のものとは何か。これは聖靈です。ですから、ヨハネ伝第1章1節に既に聖靈のことが隠れているということをはつきりと見破らなくてはいかん。私は今までこのことを言つたことがないかもしれない。ヨハネ伝1章1節に、実は神・キリスト、そして隠れたる聖靈がそこに在る。キリストは、

「隠れたる父、これを聞き給う」

と仰つた。隠れたる聖靈がこれを執り成している。「共に在る」ということが、御靈が、靈が——人間の普通の關係では心が——あい通ずるのでなければ、「共に在る」とか、友だちとかいつたつて、本当の友だちではない。この第三のもの即ち御靈があるからこそ、この「共に在る」ということがありえる。御靈があるからこそ、「共に在る」ということがもうひとつ深い世界に、

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

という世界に入つてくる。この神とロゴスとは、



「われ汝のうちに、汝わがうちに」

という関係が、その共在の奥に内在関係がある。そういう世界。もうこれだけでも、福音はなんと素晴らしいかとおもう。

第1節がどうして読めるかというと、そこまで掘り下げなければ、第1節が読めないです、「共に在る」なんていつたつてね。

「そうですか」

くらいなところで。本当に「共に在る」ということは、そのような内在関係の第三のものをもつて結びつけられていなければ。それが「われ汝のうちに」ということ。

ベートーベンが永遠の恋人に書いた手紙に、

「われは汝のもの、汝はわがもの」

と終わりの方に書いた。そういうような関係が、神的な関係において、神・キリストは、

「われ汝のもの、汝わがもの」

という、神とキリストの関係は、父と子との関係はそのようなものです。だから、1章18節の、

「ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり」

という節は素晴らしい。

「父の懷にいる」

という。神さまの懷にござるのがキリストですから。我々の信仰の質がそのような質になつてこなくては。だから、私は

「いわゆるプロテstantでもカトリックでもありません。キリストの直弟子たちのあのキリストに直結の世界にゆこう」と言つてゐる。これは正直、私はその点で戦つてきた。

●生命の靈氣を受ける

「³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。」

一切の被造物は、その根源はこの神・キリスト。具体的に神の意志を行ずる者は、靈界のキリストである。

「我はアブラハムよりも前にありしなり」

と言つたキリストです。創世記から默示録にいたるまで、何が証しされてゐるか。

「聖書は我について証している」

と。即ち、キリストについて証しているとはつきり言えるのは、イエスがそのようなキリストとして、ロゴス・キリストとして、天界におられた。そこからきているわけです。

そのことをしつかり受けとつて、このヨハネ伝1章18節まで書いた筆者というのは素晴らしい



らしい。パウロさんもちよつとこのところにはかなわないくらい。エペソ、ピリピ、コロサイになると、パウロももちろんこの次元です。

⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。

「血のあるところにいのちがある」

という。私たちの肉体は、大体三分の一の血液が流れ出たら死んでしまうそうです。肉は取られたつて死にはしないよ、片手や片足がなくなつたつて。ところが、血は流れ出ると死んでしまう。ですから、

「血はいのちあるところである」

とヘブライ人は既にそれをみている。さて、その血はどうして血でありうるか。空気を吸つてはいる。私たちは今、呼吸を止めてごらん。どうなるか。窒息して死んでしまう。これは血の循環ができなくなつてしまふ。血の循環とは何ですか。いつも新しく空中の酸素を受けとつて、浄化されているわけでしょ。いのちせられている。即ち、気を受けているんです。血氣という——若い者は血氣が盛んだなんていうけれども——気がなければ血が血でまたありえないわけです。自然的生命としての我々はそうである。

今度は、靈的生命として我々がある。靈氣を受けなかつたら、これはいのちしえない。それなのに、この靈氣を——はつきりいえばこの御靈のことです——靈氣を受けないで、なんのかんのとやつてはいるようなキリスト教は、それがカトリックであろうと、プロテスタンントであろうと、もうおはなしにならない。なにもカトリックやプロテスタンントを私はけなしているのではない。みんなそこにも本ものもいます。けれども、キリストの直弟子たちはみな聖靈でもつて生かされていた。

ブルンナー（エミール・ブルンナー 1889～1966 スイスの神学者）さんは『教会の誤解』という本を書いている。あとで少し紹介してもいいけれども。實に聖靈のことをはつきりと言つてます。言つてはいるけれども、ブルンナーさん自身が、それでは聖靈体験でこの使徒的な次元まで行つてはいるかというと、行つてはいない。そうなつてくると、どうしても使徒的信仰に本当に直結して進むようなひとでなければ、この聖書の世界を受けとつてはいると言えないわけです。

靈的な生命の教会もありますよ。けれども、そうでないのが多い。いい加減な教会にいつへん行つて「ごらんよ、窒息しそうになるから。そこで窒息しそうにならなかつたら、ダメだよ、なるほど私の方が生きているな」

と思わなくては。「これはいい所だ」なんて、そんな観念でもつて満足するような信仰だったら、ここにいる必要はない。私は自分のことを言つてはいるのではない。キリストの事態は、私たちが今受けとりつつあるところの事態は、そんなものとは違うんだということです。

この頃は、私はどこへ行つたつて、もうはつきり言う。昔から相当はつきりしていまし



たけれどもね、陸軍にいた時から。阿南陸軍大臣が、元東京幼年学校の校長をしていた時に、宗教となると私に訪ねられた。私ははつきり、宴会に行つても、杯はひつくり返してしまつて全然飲まない。この頃は少し飲みますけれども。無教会時代だったから、

「酒は飲みません、水をいただきます」

なんて言つてね、それだけはつきりしている。この頃はお酒の相手はしたつて、中味ははつきりしますから。

藤田東湖の「正大之歌」というのがある。

〔天地正大の氣〕

粋然として神州に鐘る。
秀では不二の嶽と為り
巍々として千秋に聳ゆ。
注いで大瀝の水と為り
洋々として八州を環る。
発いては万朵の桜と為り
衆芳とに儂ひ難し。
凝つては百鍊の鉄と為り
銳利兜を断つ可し。」

〔天地正大の氣〕といふ。

〔天地に満つるところの正大の大氣が粋然として神州に鐘る〕

「神州」とは日本の国。日本は神の国だから。日本人はもういつぺん新しく神の国ということを自覚しなければダメです。

〔秀では不二の嶽と為り〕

富士山は日本の象徴だ。天地正大の氣が結晶すると、あのような富士となるという。素晴らしい魂です、こういう句を歌うとは。

〔巍々として千秋に聳ゆ〕

千歳に聳え立つて不滅の山です。

〔注いでは大瀝の水と為り〕

天地正大の氣が注いで大海の水となつて、

〔洋々として八州を環る〕

この日本の八州をめぐりめぐつて、

〔発いては万朵の桜と為り〕

「大和心の人問わば」という本居宣長のうたがある（敷島の大和心を人問はば朝日にはほふ山桜



花)。即ち、桜は日本人の心の象徴である。くよくよしてない。パツと咲いて潔く散っていく。また武士の心もある。

「衆芳^{とも}に儔^{たゞ}難^し」

「衆芳」というのはいろいろな花。とても桜にはかなわないと。

「凝つては百鍊の鉄と為り」

これが凝集しては百鍊の鉄となつて、

「銳利兜を断つ可^べし」

と。これが「天地正大の氣」だという。この天地正大の氣が自然界にそのように充满している、浸透している。いわんや人間においてこれが顯さないでどうするか、とまあいうわけです。

いわゆる民主主義で多数決でやつたら、あれは衆愚主義というので、衆愚主義なんてものは鳥合^{うごう}の衆みたいなもので結局、類型的な人間ができるだけで、どうにもならん。

一人ひとりが、

「私はこの幕屋をしょつてているんだ」

というだけの覚悟をもつて、あなた方もやつてもらわなくては。女の方でもそうですよ。それだけの気持でもつてお互いに結びあう。それはありがたいことに、私たちは聖靈をいただいていますから。人間的なゴタゴタも、人間だからあるよ。けれども、そんなゴタゴタは常に突破して、そして進んでいくのではなくて、何が聖靈の器であるか、何が十字架であるか、というわけです。みんなとにかくそれぞれ使命を持つて進んでください。

●青ノ洞門

「これに生命^{いのち}あり」

というのはそういうわけで、この天地正大の氣です。聖靈は天地正大の氣で、藤田東湖もキリスト教にぶつかつたら、

「ああ、そうだそうだ」

と言つて喜ぶでしょう。この天地正大の氣は、私たちにとつては御靈です。「これに生命あり」というのは、そういうた靈的生命でなければ生命ではない。正大の氣が私たちを貫く。

あなた方は富士山を見てごらん。そしたら、富士と同じようなこころになるから。ころとこころが通ずる。花を見れば花となる。やさしいこういう花を見たら、やさしい心になる。まああまり花ばかり見ていると、やさしくなつて困るわ(笑)。

女人高野山(室生寺)に行つたときに、千二百年もした銀杏の樹そして樹齢千年もたつているところの杉の木立がある。本当に摩天樹だね、天を摩している樹。これを私はじつと仰ぎ見て——私はとにかくそういう所に行くと必ず立ち止まつてしま——そして、その樹と同じ心になるまでは退かない。



青ノ洞門だつてそうですよ。私は本当に感激してしまつた。まだ知らない人があるから、これを読んで聞かせよう。

「奇石怪石の連なる耶馬渓を訪ね、かの菊池寛の『恩讐の彼方に』で有名な青ノ洞門の現場に来てみて、そぞろに魂の引き締まるの想いであつた。仰げば断崖を辿る一条の路。それは鉄鎖の助けを要する路とも言えぬ細道。これではほとんど毎日墜落の犠牲を出したのもうなずける。見るからにぞつとする路。禪海和尚が三十餘年を一貫、毎日一つの鑿と一つの鉄槌で岩穴を掘りぬいて、人命救助の大願を成就した往時を冥想したとき、全身をある靈感が貫いた。こうしう感動は滅多にあるものではない。御靈をいただいているこの身の有り難さである。もし、あの場に誰もいなかつたならば、私は岩穴に身を投げかけて感涙にむせんだことであろう。この度の旅行で最も感動を覚えた瞬間であった。高い石段を上つて羅漢寺を訪ねた時、この禪師の用いた鉄槌と鑿を現にこの眼で見た。その鉄器の中に禪師の人命救助の愛の魂がこもつてゐるのを感じた。人生万事、森羅万象これを生かすものは神仏に通するこのよつた愛のみである。」私の今度の「ハレルヤ」誌（第39号、1974年12月）の一番大事な一節です。

生命が生命であると同時に光である。これはもう、

「レーベン（生命）、リヒト（光）、リーベ（愛）、ルフト（大気）」

この四つの「L（エル）」は風車みたいにグルグル回りますから。「L」の字を四つ中心に集めると、風車の翼みたいになる。だから、私はオランダの風車が好きなんだ。風車の翼を見るとそういうように想うものだから。なにしろ、この私というやつは、あなた方はちょっと意外に思うかもしねれない。

そういう「レーベン、リヒト、リーベ、ルフト」、これはヨハネ伝のヨハネの性格が正にそう。キリストが全くそうです。彼は靈であり、生命であり、光であり、愛である。この四つは切つても切ることが、離すことができません。

ちょうど三位一体の神さまと同じようなわけです。観念だとバラバラになるけれども、キリストは実体ですから。キリストという実体は実は表現できない。もちろん義という言葉も出てこなければならない。

●神聖なる太陽へ

⁵光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

「暗黒」というのはこの罪の世のことです。

「之を悟らざりき」

は、あるいは

「之に勝たなかつた」

とも訳せる。要するに現世は、神ぬきの世界は暗黒である。サタンに支配されている世界



は暗黒である。ところが、暗黒そのものは何も悪いのではない。私たちの自然的生命は、地球がグルグル回転して、夜がこなかつたら眠られないわけだ。神さまはちゃんとそういうようにこの生命を造つていらつしやる。しかし、夜を悪としてではなくて、非常に冥想の、祈りの時であると、私たちは受けとつていかなくては。ロマンティストは、浪漫派の人たちは非常にその意味において夜が好きだ。ノバーリスの「夜の讃歌」という有名な詩がある。それは、夜はまた星が出るから。ダンテはこの星が非常に好きだつたから、ダンテの『神曲』の最後はみなこの「ステラ」「星」という字でおわっている。ゲーテは「ゾンネ」「太陽」が好きだから、『ファウスト』の一番先にも

「太陽は昔ながらの調べをもつて響いている」

とある。終わりもやはり「太陽」で終わっているかと思つたら、これは終わりそこなつたね、ゲーテは。だから、私は付け加えてやつた(笑)。

「愛と歓びをもつて

神聖なる太陽へ！」

と、私たちを引きゆくという句を私はあの偉大な『ファウスト』の一番終わりに一行付け加えてやつた。ゲーテは何と思つているかしらんけれども。

「東洋にはとんでもないやつがいる」

と思つたかもしれない。これは世界でそんなことを付け加えたのは私一人ですよ。

私はこんなやつですけれども、非常な大望をいだいています。どうしてもあと20年は少なくも生きないと、仕事が終わらない。まあ90までくらい生きるつもりですよ。

どうぞ、皆さんもひとつ何かやり遂げてください。どこでぶつ仆れたつていい。「志が大事だ」と、これはブラウニングもそう言つてゐる。

これは洗礼のヨハネですよ、⁶神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。

⁷この人は証^{あか}のために来れり、光に就きて証^{きた}をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。

即ち、光や言や生命を信ぜんがために。

⁸彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

そういうヨハネというひとがやつて來た。けれども、これをなかなか受けとらなかつた。最後の預言者ですね。

⁹もろもろの人をてらす^{まじ}の光ありて、世にきたれり。¹⁰彼は世にあり、

世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

私たちは神さまに造られてゐる。この世界もみな神によつて造られて、保たれてゐる。

皆さん、本当に烈々たる魂になつてくださいよ。何をやつていていいけれども。私も集会をもう30何年かやつてゐるけれども、今のあなた方に一番期待をかけているわけな



●神に直結の世界
んです。

¹¹かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。¹²されど之を受けし者、

即ち、この光を「受けし」とは何ですか。「本当にこの人は救い主である」と、これを救い主として受けとる。

「光はこの人の他にない。生命はこの人の他にない。愛はこの人の他にない」というような意味において、これを受けるんですよ。

即ちその名を信ぜし者には、

その名を、イエスというこの「ロゴス・キリスト」を、このイエスというひとの名を受けとる者は——「信する」といつたつて、「受けとる」といつた方がいい——名を本当に受けとつた者は、

神の子となる権をあたえ給えり。¹³斯^{かか}る人は血脈^{ちすじ}によらず、肉の欲^{ねがい}によらず、

人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。

と、畳みかけて言つてゐる。お父さんが、信仰があるからといって、子どもに信仰があるわけにいかない。みなこれは神に直結の世界です。それが「血脈によらず」ということ。親戚関係だからどうの、親子関係だからどうの、兄弟関係だからどうの、ということではないという。だから、

「自分の祖先にアブラハムがいるからといって、いい氣になつてゐるユダヤ人はダメだ」と、キリストは言つてゐる。

「靈の子であれ」

と、結婚をしようがしまいが、本当に靈の子をつくつていかなければしようがない。本当の靈の親子の関係、靈の兄弟姉妹の関係、これが永遠です。いわゆる血筋的な関係はこの世の関係である。それが本当にそこにお靈的な関係が続けばいいけれども、続かない場合がいくらもあるね。あなた方のご家庭でもどうですかね。

「肉の欲^{ねがい}によらず、人の欲によらず」

血筋を捨て、肉を捨て、人の願いを捨ててかかれ。そうすると今度は本当に、血筋を、また肉を、人の願いを正しい意味において満たしていくことになると。

「我よりも父母や何々を愛する者は我にふさわしからず」と。

「それでは、キリスト教はけしからんじやないか。危険な宗教だ」

といって、だいぶ明治大正の頃はあれされたわけです。この頃は家族制度がぬけてしまつ



たから、そんなことを言わなくなつたのか何かしらないけれども。正しい意味においては、家族関係というのは私は大事だと思っています。何か妙なマイホーム主義はダメですよ。相対関係を本当に正しくまたうるおいのあるものにするためには、神・キリストとの絶対関係が立たなければダメだということです。

「本当の平安がないところには平和はない」

ということをいつているのと同じです。キリスト教こそ本当の意味において、一番この中道を、そして素晴らしい有機体的な組織を持ち得る真理をもつていて、大事なこの大黒柱が立たないものだから、いつまでたつても始まらない。

学校の生徒に幕屋の絵を書いて——「幕屋」の話をしたのではない——この縦の大黒柱は「敬天愛人」であると話した。これは私がいつも言つてゐる西郷南洲の言葉。それから三本の柱（綱）は、「天賦天職」と「自律自彊」と「自由創造」です。「天賦天職」は、天から賜つた才能をもつて自分の天職とせよ、その自覚をもつて勉強しろ。「自律自彊」は、自ら律して、自らを彊めろ、自らを鍛えろ。先生に言われたからどうのこうのではない。自分ではつきり律していけ。自律が本當にあるところにはじめて自由がある。自彊していくところに創造的神が湧いてくる。「自由創造」です。そういう天幕の構造だから、この大黒柱をまず立てなければダメだ。あとこの二つの柱（綱）で天幕ができるんだと話した。

●キリストは無者

その次の14節。1章の1節、14節、18節がポイントです。

¹⁴ **言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、實に父の獨子の栄光にして恩恵と眞理とにて満たり。**

この「ロゴス・キリスト」、天界の「言」、あるいは「道」といい、あるいは「靈言」といわれるところの、この「ロゴス」が——いわゆる「受肉」「インカネーション」という——肉体をとりて、今度は「サルクス・クリストス」、肉のキリスト、即ちイエスとして現れる。靈界のキリストが今度は、マリヤを通して地上に、ナザレ人としてエルサレムの一画のベツレヘムに生まれたという。そういう肉体となつて、私たちと同じ相対的な人間となつて、キリストもその弱さをちゃんと持ち、罪を犯す危険性も持つてゐる。ただ罪を犯さなかつただけのはなし。

「罪を犯さなかつた」

というと、何か悪いことをしなかつたと思つてゐるけれども、そうではない。そんなことは結果のはなしで、「罪を犯さなかつた」という言い方がおかしいんだ、本当は。

キリストは常に神と一つである。ヨハネ伝1章1節を地上でもつて地で行つたひとです。危険にさらされながら、また彼は私たちと弱さを共にしてゐるから、自我というやつがくるよ、「わが意志」「わが願い」というやつがくるよ。だから、いつも根底の祈りは、



「わが意にあらず、汝の意をなきせたまえ」と。神さまの御意を常に聴きながら、それを「はい」と言つてそれに従つていた。だから、私はキリストのことを「無者」と言うんです。無私、私の無いひと。無者であるから、無限、無量者となつた。

「0=∞」（ゼロ・イコール・無限大）

であるという。これをはつきりやつたのはキリストのほかにいない。お釈迦さんは最後にそういう境地に入つたでしょう。孔子もある程度そこまで行つたでしょう。けれども、イエスというひとは、初めからそういうひとだからしようがない。12歳のイエスが坊さんたちを相手にしても負けないんだから。神さまのことを「お父さん」と言つてはいる。

「私はお父さんの言うことを聴くことの他に聴き方がない」

と。でありながら、しかし、どこまでも人の弱さを、人の罪を思いやることができる。誰よりも一人ひとりを思いやることのできるひとである。これがどん底の愛という。お高くとまつていない。

「私は聖者なり」

なんて言つて、高くすまして、

「あれは汚らわしい」

なんて言つてはいるのではない。キリストは、汚らわしい人であろうと、癩病人であろうと、どんな者でも相手にして、それをみな包んでしまう。そして荷なつてしまふ。みな救いあげてしまふ。最後には、十字架上の片一方の盜賊まで、

「お前は今日、私と一緒にパラタイスだ」

と言つた。本当に神の愛を、神の心を心としていなければ、これはできない。その極致が十字架の愛です。

私たちが「十字架」と言つた時に、ただ「贖罪」というような命題を信じたつてダメですよ。「十字架」というときに、十字架に極まつて結晶しているところの、あそこに流された血の中に結晶しているところのキリストの愛が、私たちの中に、私たちの血の中に流れてこなければ。「聖晚餐」という、

「これわが血なり。これを飲め」

と言つたのは、そのような意味ですから。

「わが愛の血を受けとれ。汝の血をわが愛の血とせよ。わが靈の肉を汝の肉とせよ」と。即ち、靈の血、靈の肉。しかもそれは、どこまでも質は愛です。

さきほどの、青ノ洞門の禅宗の和尚さんが30何年も、雨が降つても風が吹いても毎日コツコツと穴を開けて行つた。大変なことです。皆さんも、人からは何かキチガイと思われるようなことをしてください。つまらないですよ、地上の生涯は一遍しかないのだから。私みたいに70まで大したことのできないようなやつの真似をしたらダメですよ、皆さん。あ



●キリストの幕屋

「言は肉体となつて、我らのうちに幕屋を張つた」

という。我々の間に幕屋を張りなさつた。「スケノオー」という字で、「エスケーノセン」と、こここのところは完了形で書いてある。

「ロゴスがサルクスとなりました。そして、我々の間に、我々のただ中に彼は幕屋を張りなさつた」

と。この「幕屋」というのを、私が1942年4月28日、病床にありながらそのことにはたと気がついたことをそこにも書いてあります。一人ひとりの「a・b・c」という三角形を底面として神・キリストを大黒柱（垂線）とした幕屋（三角錐体）になるわけだ。であるから初めて、この「a・b・c」の関係が、本当の御靈が環と流れる、環流するわけです。上からは、貫き流れてくる、貫流してくる。御靈の貫流によつて、我々の間には御靈の環と流れる環流がある。

「我々の間に宿り給えり」

という訳は、本来は「幕屋を張つた」という言葉ですが、この漢文の訳はちょっとそこのところは弱いな。

「それ道は肉身となりて、我らの間に居る」と。

「居る」ではしようがない。

ところで、今日は「キリストの幕屋」という題を出しましたが、キリスト自身が即ち神の幕屋なんです。この中に充满しているのは御靈です。もちろん、幕屋の旧約的な意味は、ヘブル書8章から10章を見てください。あそこに徹底的に書いてあるから。そこに書いてあるように、イエス・キリスト自身が旧約における幕屋の事態の宗教を完全に満たして、これをアウフヘーベン、棄揚（止揚）してしまつた。そういうイエス・キリスト自身が即ち、彼の肉体そのものは、存在そのものが幕屋である。これはパウロも言つてゐるでしょ。

「我々のこの幕屋がくずれたら、天に在るところの新しい家に移る」

というような言い方をしてゐる。我々の肉体のことを「幕屋」というような言い方をパウロはしているが、イエス・キリスト自身が、あのパウロの表現をもつていえば、彼自身が、キリスト自身が幕屋であるわけです。

即ち、彼には神の意志を行じていくところのこの縦の太い線、これは「義」です、義の柱です。義の柱が立つてゐる。

「汝の意志を成らせたまえ」

というこの縦の関係がはつきり立つてゐる。神さまに對して「然り」と言つてゐる関係が「義」なんです。そこには私心がないから、非常に強くなる。本当の強さはそこにある。私の無

なた方は、私の年配になつたら、まぶしくて見えないような人になつてももらいたい。



いところに本当の強さが出てくる。キリスト自身が——そういつた表現でいうならば——さつき言つた、「愛と光と生命」のこの三つの切つても切ることのできない筋をもつて、それで人に向かつてこれが流れいくところの——むしろ「キリストの幕屋」といえば、人を中心に入れるわけです。人を中心に入れるところの、この三つの柱の「愛と光と生命」——これは象徴的に私は言つているんですよ——愛と光と生命の中に私たちを入れてくださるわけです。彼自身が幕屋として。入つてみると、そこは御靈が充满していて、この御靈はみんなこの愛と光と生命の質を持つた御靈ですから。そういうように私は比喩的にこれを考えるわけです。

だから、パウロが

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と言つてゐるでしょ。あの事態はこのようなキリストの幕屋の中に自分が入る。そうすると、我々自身が今度は幕屋的存在になつてきます。そして、一人ひとりがまたそのようにして、そういうつた群れが本当に愛と光と生命に満ちた、そういうつた交流となる。そういうつた生命的なキリストの生命の通つてゐる、靈の通つてゐる、聖靈の通つてゐるところのものでなければ、これは教会とは言えない。これはブルンナーさんが言つてゐる通りです。

●聖靈の幕屋

「キルヘ」（独）とか「チャーチ」（英）とかいう字は、「教会」という字はもともと「キリスト」（ギ）「主」という字からきてる。「教会」という訳が本当はおかしい。あれは「主のもの」と訳さなければ。「キュリオス」からきてこの「キルヘ」とか「チャーチ」という言葉ができるんだから。だから、「主のもの」というんだ。本来は「チャーチ」とか「キルヘ」というのは素晴らしい言葉、だけれども、すつかり制度化してしまつて、聖靈がなくなつてしまつて、ダメになつてしまつたから、マルチン・ルターでも「キルヘ」という言葉を使わない。彼は聖書の中で「ゲマインデ」と言つてゐる。「共同体」です。実存共同体、靈的共同体。キリストと生命を共にしてゐるところの人たちの集まりです。「エクレシヤ」というのは「召団」という、「召されたる者の集まり」という意味だ。藤井先生が「召団」と訳したから、私はこれを使つてゐるだけのはなしです。

召団でもエクレシヤでもいいけれども、本来は旧約から來てゐる。創世記から默示録にいたるまでこの「幕屋」という言葉が貫いてる。そして、この幕屋の構造が非常におもしろい。私たちは「聖靈の幕屋」です。キリスト自身が幕屋であると同時に、「キリストの幕屋」という。私が今日言つてゐるところの「幕屋」は「キリスト」という幕屋ですよ。ところが今度は、「キリストの幕屋」ということになると、本当に聖靈を宿してゐるところの——どこの教会でもいいですよ、無教会にもそういうのがあつたらいですよ、どれでも——そういうのが、イエス・キリストが天界からちゃんと見ておられる、



「これは本ものものか、これはうそものか」と。

それが大きな意味でもつて「キリストの幕屋」となつてゐる。私はそう言いたい。全

世界にキリストの幕屋は散つてゐる。それがキリストの幕屋だか、いいよそなことは。

いわゆる「エキュメニカル・チャーチ」なんていつて、教会一致運動なんかいらないですよ。

「それそれがそれぞれの集まりで本ものであるかどうか」

が問題なんです。カトリックでもプロテスチアントでも無教会でも、何でもいいよ。ただし

「それが本ものか」

と言いたい。

そうしたらば、それが「キリストの幕屋」なんです。そしてやがて、新天新地が来て、神の国が来たときに「神の幕屋」という言葉が默示録に書かれている。歴史的展開として、「聖霊の幕屋」は、各集会が聖霊の幕屋でなければならぬ。全体として世界に「キリストの幕屋」がある。そしてやがて歴史の終末に「神の幕屋」がくる。幕屋の構造は、歴史的展開で私はそういう表現をもつて言うんです。そういうような表現は、未だかつて誰もやつてませんよ。

私は、地上において「神の幕屋」と称うのは畏れおおい。最後の世界で「神の幕屋」である。「聖霊の幕屋」として一つ一つの集会がある。けれども、聖霊の幕屋といつても、いつたい人間の相対的存在というものは、どれがどんなによくたつて、決してそれが完全ではありません。私のところだつてももちろんそうです、破れ幕屋です。破れ幕屋であるけれども、破れの中に聖霊はちゃんとある。そういうことですよ。人間の品定めをして、

「あればいい、これがいい」

なんて、そんなくだらぬ相対的判断は、私は乗り越えています。神さまの前に、ただ平伏していることだけが大事なんです。そうしたらば、本当に光がやつてくる。そして常に展開していく。

キリストというこの驚くべき幕屋。天界におられるところのキリストは、今、私たちに特にこのクリスマスで降誕、降臨された。だから、私たちはこのキリストという、ヨハネ伝1章1節を具体的に、「神・キリスト・聖霊」という三位一体の事態を表現されるキリストを迎えることが——なにもただ赤ん坊を迎えるということではない——そのキリストを迎えることが私たちにとって、我々は即ちキリストを迎えて——キャンドルサービスというけれども——キャンドルとなり、また本当に生命となり、愛となるということでなかつたら、クリスマスなんてのはつまらないですよ。

「今日は何かしらんけれども、確かにもうひとつ、新しく生命してきました、光してきました、愛してきました」

というようにして進んで行くわけです。私たちの魂はそのようにして、絶えず上からやつてくる時と所をつかまえては、瞬間をつかまえては進んでいく。人生というものは、この



瞬間をつかまえそこなう人は決して本当の意味において目的を達しません。大事なことは瞬間をつかまえることです。事業をする人でも、瞬間をつかまえることのうまい人は事業が速い。瞬間を見逃すと、今度はその次の機会というのはなかなかやつてこない。

●『教会の誤解』の一節

「我らのうちに幕屋を張つた」

と。即ち、キリスト自身が我々の間に幕屋を張られた。彼自身が本当に幕屋そのものであるから、「我々の間に幕屋を張つた」ということは、もうひとつ突き抜けて言えば、「わが名によりて集まるところ、即ち我もあるなり」

という幕屋を張られたわけです。即ち、キリストの名において私たちが集まるところは即ち、本当の幕屋である、エクレシヤである。その他の制度的なものは何もいらん。

ブルンナーさんの『教会の誤解』の一節を読んでみます。

「復活の出来事によつて新しく基礎付けられたところの弟子たちの教団は、聖靈降臨において今までの隠されていた状態から顕れてきた。かくてメシヤの秘密が明かにされ、同時にイエスのメシヤたることの理解が一変されたのである。即ち、今やイエスはメシヤたるとともにまた、世の罪を負いて悩める神の僕と認められ、今なお生ける復活の主即ち、その靈によつて彼に付ける者たちに臨在するキュリオス、主でありたもつ。弟子たちの教団はそれからはつきりと聖靈の交わりによつて規定されることになる。即ち、それはただ単に歴史的想い出によつて成立するのではない。否、彼らは彼らと食物を共にしたまゝ主が今や彼らのうちにいまし、共にいましたもうのである。即ち、聖靈において臨在する主がエクレシヤの生命原理なのである。しかし、聖靈は現在における救いの恵みであることによつて、同時にまた来らんとする初めの実（アパルケー、ロマ8）である。主の臨在を喜ぶ者としてのエクレシヤは同時に烈々な期待をもつて来らんとする者を待ちかまえていいる。けだしエクレシヤが現在持つてゐる驚くべき賜物、即ち聖靈は同時にエクレシヤを来らんとする者と結びつけるといひの保証（アラボン）に他ならない（エペソ書）。かくてエクレシヤはイエスによつて建てられたかどうかという問題は重要ではなくなる。エクレシヤはいかなる場合にも、彼のうちにそして彼によつて建てられていく。けだし彼はその体たるエクレシヤの首であるからである。即ち、聖靈の賜物とイエスの見ゆべからざる臨在にあずかることとは互にに区別されえないほど密接に結びついてゐる。さればこそ主は靈であると言つてゐるのである（マリント後書）。かくてイエスの教団は本来の契約の民となるのであって、その歴史は旧約のうちに始まるとはいへ、それが全く現実となつたのは主の活ける臨在によつてである。この教団は靈における神の民（ラオス）に他ならない。それはいかなる意味においても制度でもなく、活ける首の活ける体に他ならない。」



このブルンナーさんの言う通りです。我々はもちろんそのことを自覚しているわけです
けれども。

●「信仰」でなく「信交」

「幕屋を張りたもた」という、このキリストという幕屋を受けとることによつて、いよいよ私たちの事態が、聖靈の幕屋としてはつきりとこの14節をもつて自覺されるわけです。

¹⁴ 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその榮光を見たり、實に

父の獨子の榮光にして恩惠と真理とにて満たり。

この聖靈というものは限定できない。聖靈こそが本当に恵みであり、また真理である。「恩惠と真理」、これはパウロの書簡にもしょつちゅう出てくる。この「アレティア」「真理」という字と「ピスティス」「信」（信仰、信実）。真理と信実。

「真理」というと、どうしても私たちは、言葉が観念的になる。無教会でも、藤井先生は「真理」という言葉が非常に好きだったけれども、なお原理的な気持が強かつた。先生の使つている、まだ時代的な制約もありましたから。先生自身は決して観念的な人ではないけれども、どうも思想的にいうとまだ観念の面が強かつた。

それから、この「信仰、信実」「ピスティス」は、「信仰」の「仰」の字はいらない。「信」でいい。キリストという具体的な活ける真理は、

「我は生命なり、道なり」

でしょ。生命、生ける真理、道なりという。道は、申し上げている通り、日本人には非常に親しい言葉です。柔道、剣道、茶道、華道。お茶でもお華でもみんなこれは道ですよ、みんな身につけなければならない。頭で分かったのではしようがない。そういうた道の民なんだ、日本人は。道の人、道人。

そういうキリストという生ける具体的な真理の内容はとても限定できない。そいつを受けることがこの「信」なんですから。この「信実」の「実」の字はない方がいい。「信実」というと、へたすると、なにかこちら側のいわゆる信実性なんてことになつてしまふと、困るんだよな。私はむしろ「碎け」と言いたい。そいつを受けとる「信」ということ。

だから、「信仰」の「仰」の字が困るんだ。「信交」と書きたい。仰ぐのではなく、もつと交わりたい。その中に入らなければ、本ものにならないんだから、仰いでいたのでは。やはりそういうた今までのありきたりの概念をもう突き破らなければダメですよ。

「信仰、信仰」

なんていつてね。まあ「信仰」というときには、「仰ぐ」なんて思わないで「信仰」という言葉にみんな思つていますけれども。わざわざ「仰ぐ」なんて思わないけれども。ちょっと「仰」と「交」という字がじやまになるんですよ、私は。「信」です。もし「こう」なら「交」「信交」と書く。



そのように、キリストとの交わりの世界でこれを受けとることをしないかぎり、真理であることがつかめないんです、絶対に。

一 真理とは何ぞや

聖言の現実の中に自分を入れていく

だから、私たちは聖言を読みながら、直ちにその現実の中に自分を投げ入れること。それが「信」なんです。「信する」とは、

これがせんは分かりませんか
信しておきまし

なんのは絶対に「儲かる」ではない。自分をその中に投げ入れて、何かしらんか。その現実が自分の中に入つてくる——私は今、何か言おうとすると異言になりそうになる——そういう事態には、これはやはり普段から祈りを深めていなければダメです。

聖書を読みながら、『その中に自分を入れていく』ことが祈りなんですね。いいですか、祈りというのは。

聖言の中に、聖言の現実の中に自分を入れていくのが祈りなんですよ。祈りであり、冥想である。そうすると知らない間に、何だかしらんが、力が来てしまうんです、力が。ええ。

「はい」と言つてゐるんだろうと思うけれども。あなた方、「はい」と言わないんですか。え？本当にそうでしょ。黙つてゐるけれども、

なんていうのがいるかいないか知らんけれども。

だからもう14節みたいなどこのを読んでいると

「言は肉体となつて私たちの間に幕屋を張つた。私たちはその榮光を見た」
あらわ

言は肉体など、て和たぢの間に幕屋を張りた
和たぢはその栄光を見た
と。現実にそこに現れたことが「栄光」なんです。神の隠されたる現実を露^{あらわ}なる現実にし
たんです。「露^{あらわ}」という字は——露頭の露という字です、「シェキナー」という——そこに顯
現することです。だから、不思議なことにその顯現の予表としてあの星が輝いた。

なにもそれは占星学ではないよ。占星学ではないけれども、天体の動きと人間の——私は「易」^{えき}のことはよく知らない。易も少しは勉強したいと思っているけれども——なかなかいろいろ関係がある。そつちの方の詳しい人が言うことがかなり当たるので全く参りますけれども。これは宿命論ではない。ある人にはそういった運命的な波がある。信仰の世界なら、その波をどういうように乗り切るかということができる。その波に処していくことが、やはり信仰が大事なんです。

實に父の独子の栄光にして恩惠と眞理とにて満^{めぐみ}たり。15 ヨハネ彼につきて証^{まこと}をなし、呼^{まわ}りて言う『「わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にあり



「我より前にありし」というのは、天界におられたから。

我がかつていえるは此の人なり¹⁶ 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、

恩恵^{めぐみ}に恩恵^{めぐみ}を加えらる。

「恩恵」といつたつて、何かもらうことではない。靈界の生命、光、愛、真理、これがやつて来てしようがない。これが「恩恵」。イエス・キリスト自身が恩恵そのものです。

ドイツ語の「グナーデ」と「ガーベ」は分けて使う。「グナーデ」というのは「恵み」で、それが今度はいろいろな、その人にとつて学問の上にひびいたり、あるいは音楽だつたらピアノがうまくなつたり、ソロバンがうまくなつたり、あるいは人を癒す力が与えられたり、いろいろな賜物が出てくる。これはコリント前書12章から14章に書いてある通り。そういうようなわけですが、恵みそのものはどこまでもキリストです。キリストという恵みをいただいたら、賜物はその人によつていろいろに展開してくる。

●十字架という門を通れば聖靈がくる

それで、降誕節だけれども、やはりどうしても言わなければならぬのは十字架なんです。即ち、そのようなキリストを受けとるのに、ではどこから受けとるのですかという。申し上げてある通り、十字架という門を通つてです。十字架でもつて自分というものがすつ飛ばされている。

「お前という自我は全部この私が引き受けたよ」というのが十字架ですから。

「はあ、自我はあいからわざありますけれども、そいつはもう問題にしないでいいんですか」

「はい、そうだ。いいんだ。いつまで問題にしてどうなるかというんだ。そんなものは問題ではない。私が全部引き受けた。」

と。そこが即ち、十字架の門ですから。それはもう恐れなく平伏して通れば、その先は聖靈がやつて来る。そして、この始末の悪い我々一人ひとりをどしどしその聖靈の力でもつて、貫き、動かし、淨化し、また熱くし、豊かにし——もう何とでも言えませんけれども——そういうようにして突き進んでいく。

親鸞の信仰は素晴らしい。素晴らしいけれども、キリストのこのような積極的な力を、この如来の方からほどれだけ受けたかは知らんけれども、その点では何といつてもこの福音の世界は凄い。イエス・キリストという実体があるから。真理の質には非常に似たものがありますけれども、何といつてもその点ではこの福音の方が、中味が凄いんです。キリストというこの驚くべき靈的な実体があるから。そういう靈的な実体というと、お釈迦さ



んはかなわんよ、いくらなんでもキリストには。

この福音書にはキリストの恵みの業が満ち満ちて、そうして十字架を荷なつて突破して、復活して天界に行つて、聖靈をくだすような、この驚くべきキリストという人物は——「人物」なんていう言葉では表せない——このキリストという方は何とも表現できない。全キリストを冥想したら、あなた方はもう——私はこないだ〇君の所の二階で一時間ほど祈つてているうちに詩篇23篇の中に入つてしまつて、靈動状態になつて靈震が起きてしまつた——そういうようなことになる。その時は本当に捨て身でからなければダメですよ。

私はまだあなた方はイキが足りないと思つてゐるんだが、どうだね。私は70歳ですよ、20代、30代の青年が70歳のおじいさんになつてはしようがない。

¹⁷ **律法**はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。

この「律法」のことを私は「隠れたる福音」と言つた。まあこんなことを言つたのはまた、おそらく私が初めてでしよう。聖靈によると真理が見えてくるからしようがない。神さまはイスラエルの民に十誡を与えた。

「汝わが顔の前に何ものも神とすべからず」

と。これは「神とすべからず」ではない。

「私の顔の前には他の神々はあれども無きがごとし」と言つておられるんです、本当は。

「お前と私は一対一の関係である。これが人格関係である。偶像を造つてはいかん。私は靈的存在だから」と。

「人格神であり、靈神である」

ということがモーセの十誡の第一と第二ではつきり言つてゐる。イエスは靈人である。イエスというひとは靈的な、靈である同時に人である——「靈人」という言葉はそんな使い方はできませんけれども——と同時に、神さまに対しては「お父さん」と呼んでゐる。これは躊躇です。今の人には。

「お父さんなんていうけれども、いつたい、神さまはどんな姿をしているんですか。

ミケランジェロが描いたようなんですか」

なんて。そうじやない。ミケランジェロは芸術家だからあんなものを書いた。分からない

けれども、しかし、キリストは「父よ」と言つて、本当にしがみついていた。しかも、

「父は靈であるから」

と、ヨハネ伝4章のサマリヤの女とのあの会話は非常に大事なところです。「父は靈であるから」と言つて、靈なる神さまを「父」と呼び、かつ「靈である」と言つた。いわゆる概念的にはこれは矛盾する。そういうイエスという人は「神の懷にいる」という。



¹⁸ 未だ神を見し者なし、
誰も神を見やしない。いわゆる神をいくら冥想したって、そんな神秘主義はダメですよ。

ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

神を顕したんです。だから、

「我を見し者は父を見しなり」という。

「父の懷にいる」

という表現が私は大好きだ。日本人にはよくわかる。昔は和服を着ていたからね。お母さんは小さい子どもを懷の中に入れる。

●魂の中にキリストの靈震を受けとつて進んでいく

そういう非常に親しい人間的な表現で靈的な事態をつかまえているわけです。だから、旧約聖書を見ていると、いろいろ人間的な表現が出てますよ。神さまの足とか、神さまの手だとか、顔だとか、指だとか。と言うけれども、決して偶像にはしない。そこが素晴らしいところです、聖書の宗教は。表現はどこまでも具体的な表現をするけれども、いわゆる偶像にはしない。それをみんな靈的な角度からつかまえている。しかしながら、靈は観念ではない。具体でありながら、しかも偶像ではない。こういうわけです。

だから、何といっても、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書に出ているところのキリストという、イエスという人物にぶつかつて、ここに本当に神の栄光が現れているといって受けとらなくては。これに躊躇ば、いつまでたつても、この福音の世界に入れません、降参しなければ。

「そうなんだろうか、こんなことがあるんだろうか？」

なんて疑つていたり、憶測しているうちは、いつまでたつてもダメ。

「あるんだろうか？」

なんて、そんな相対的な判断で到達できるような現実ではありません。

我々はその前に本当にかなぐり棄てて、その中に突入させられる。私みたいなおよそ靈的でない人間がどうしてこんなことになつたか、自分で不思議でしようがない。私が生まれつき靈的な男なら、そんなに不思議でもないでしようけれども。私みたいなおよそ靈的でないやつが、どうしてこの靈の世界の一番深いところを樂に受けとれるかと、不思議でしようがない。サンダーシングでだろうと、スウェーデンボルクでだろうと、彼らの言つていることをちゃんと正しい角度から受けとれますよ。

ということは要するに、パウロの神学が分かつたからではない。パウロさんも神学をしてからキリストが分かつたのではない。これはキリストと本当に一つとなつたら、パウロという器からあのような神学的な構造が出てきただけのはなし。それを今度は、今の神学



者は構造ばかり研究しているから、血が通つてないからダメだ。

もう私の言わんとしている気持は、皆さん、お分かりですね。それで、私は今日なぜあそこに「天震」と書いたか。今まで「天晨」と書いていたが。「天震」は、天が震うという、靈震の意味です。靈的震動を起こす。魂の中にキリストの靈震を受けとつて進んでいかなくては、皆さん。

そうしたら、文学をやろうと何をやろうと、いいですよ。ちゃんとしたものをつけまえていくから。文学に溺れたらダメですよ。私は文科だからよく分かっているけれども。ダンテでもゲーテでも、もうひとつという世界があります。まあダンテさんは何といつたつて第一級だと私は思っています。大したものですよ、簡単にダンテのまねなんかできやしません。けれども、なお欠けたるもののが見える、ダンテの詩の中に。

それは何といつても、聖書にある事態なんです。聖書はもう最高の書です。これは諸々の文学の源泉だから。仏典だつてそうです。何といつたつて、この仏典と聖書は世界の精神界のどん底を荷なつてている。それは全部、キリストとか釈迦とか、けたの違つた靈的な人物から展開しているんですから。それなのに、なぜそれに連なろうとしないで、キリスト教だとか、仏教だとか言つているかというんだ。だから、本当に目覚めてください。目覚めていないと言うのではない。いよいよ目覚めてください。それで、来年に向かつて突進して行こうというわけです。

